



浜松市消防団
南区支団浜松第17分団

浜松市の最南、五島地区・遠州浜地区を守る消防団。「五島村の消防組織」として、明治45年に結成され、地元住民の有志たちがその流れを継いでいる。現在、団員は地元に住む20代から50代の30人。普段は各自の職業に就きながら、火災発生時などに出動指令を受けると自宅や職場から現場へ駆けつけ、消火活動や救助活動を行う。地元での出火だけでなく、規模や状況により、近隣地区の火災や大雨、台風などの災害時にも出動する

迅速、確実、安全に。
地域を守る、熱き男たち。

「敬礼！」
真新しい消防庁舎に号令が響く。整列した団員たちは姿勢を正し、指先をピンと伸ばした状態で右手を上げて敬礼する。ひじは肩の延長線上。
消防団員には、基本動作の練習が義務付けられている。消防の任務を遂行するため、厳正な規律保持と、迅速で的確な秩序ある行動が必要とされているからだ。
「俺が小六の時、こいつが小一だった。みんなガキの頃から知っている仲間。お互い、だいぶ歳いったけどね」
訓練が終われば、一転して和気あいあいとしたムードに包まれる。子育てのことなど、お互いに相談し合うこともあるという。自営業も会社員も、会社の役員も、ここでは仕事の肩書きは



火災時には早く、正確な放水が求められる。どんな現場でも動じないよう、日ごろからの訓練が重要だ

一切関係ない。地元住民の安心安全を守るのは自分たちの責任。ただそれだけだ。
山田智徳さんはガソリンスタンドを営みながら、団員として活動している。「消防団員だった父の背中を見て育ったので、自分も団員になるのは当然のこと。地元で感謝されることが大きな喜び」と話す。
「火事は人数で消す」といわれる。「消防団員はいつでも地域に密着していて、動員力がある。消防士と同じように、私たちも消火活動をします。燃え広がりを防ぐ役割としても、現場では頼りにされているんです」。誇らしく語る姿が皆まぶしい。ひとたび号令が掛ければ、たちまち表情が変わる。気持ちのいい男たちの訓練は続く。



ホープとして活躍する松本宗大さん(左/21歳)は、夢がかなない、春から御殿場市の消防士になる。「誰かのために力を尽くせる場がある、それが自分にとってプラスになっている」と話す

浜松市 未登録 文化財

「知る人ぞ知る」名所や旧跡、文化遺産、人、もの、風景など、後世に伝えたい「浜松の隠れ自慢」を紹介します。
読者からの推薦募集中!



わらびもち1袋50円より

えびすやのわらびもち引き売り

平日は午後のみ、土日は朝から夕方まで二俣の町を引き売りする。例年5月の連休明けから始まって9月ごろまで。雨降りや強風の日はお休み。えびすやの店舗は西鹿島駅そば(浜北区上島)にあり、わらびもちと氷一貫目を積んだリヤカーをそこから引いてくる。



- 一、市民に古くから愛され続けていること
- 二、後世に伝え残したいこと
- 三、浜松らしいこと

浜松市未登録文化財 認定基準

右記の条文の内容を満たす人・もの・ことを浜松市未登録文化財として勝手に認定する

ジャンジャラン、ジャララン、ジャン。リヤカーの持ち手にくくり付けられた鐘を鳴らす音が、天竜二俣の昔ながらの街角に響く。
「わらびもち、ちょうだい」。いま帰ってきたばかりという感じの、幼稚園の体操服姿の兄妹が、おばあちゃんの手を引いて表に出てきた。
「今日も暑いねー。プールやったの？」
「うん、たのしかったー」
そんなやりとりをしながら、わらびもちのおじさんはリヤカーを停め、荷台の箱を開ける。よく冷えたわらびもちに手早くきなこをまぶす様子を、待ち切れずにのぞき込む子どもたち。手

渡された包みを大事そうに手にして、玄関先でさっそくおやつの時間だ。

「わらびもちのおじさん」こと、内山達也さんがわらびもちの引き売りを引き継いだのは数年前。その前は内山さんの両親が、そのまた前は……とさかのぼると、始まりは戦後のことという。今も二俣の夏の風物詩だ。
夕立がやって来そうな空を見上げ、少し足を早めた内山さん。
「もう一本向こうの通りまで回って、今日は終わりかな。きつとあそこのおばあちゃんが、来るのを心待ちにしているから」と笑顔を見せた。

出会えたら、ラッキー。